高等学校国語科とDP「言語と文学」における
古典文学教育指導の開発及び研究

◎中村純子（国語教育サブプログラム：国語教育学）
〇湯浅佳子（日本語・日本文学研究講座：古典文学）
斉藤昭子（日本語・日本文学研究講座：古典文学）
川上知里（日本語・日本文学研究講座：古典文学）
篠崎祐介（日本語・日本文学研究講座：国語教育学）
浅井悦代（東京学芸大学付属国際中等教育学校）
杉本紀子（東京学芸大学付属国際中等教育学校）
代表者連絡先：sumicon@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】　古典文学　国際バカロレア教育　ＤＰ「言語と文学」　概念的理解

１　はじめに

古典文学教育は、我が国における伝統的な言語文化を理解し、先人のものの見方・考え方を学ぶ重要な領域として、小・中・高国語の学習指導要領に位置付けられてきた。学習者は、自分と自分を取り巻く社会に対するものの見方・考え方を古典文学を通して先人から学ぶのである。

しかし、学校現場の古典文学の授業では、昨今なお文法暗記項目等の習得に偏りがちな学習傾向にある。平成３０年版高等学校国語科学習指導要領「改訂の経緯」でも、古典の学習について，日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く，学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されてきたとある。

こうした長年にわたり指摘されている課題を解決するため、平成３０年版高等学校国語科学習指導要領では、教材の読み取り指導から脱却し、主体的な表現等を重視する授業を実現すべく、高校１年必履修科目「言語文化」では、「思考力・判断力・表現力等」の指導領域に「読むこと」に加え、「書くこと」が設定された。高校２・３年選択科目「古典探究」では、指導領域は「読むこと」のみに限られているが、言語活動例として「（２）カ　古典の言葉を現代の言葉と比較し、その変遷について社会的背景と関連付けながら古典などを読み、分かったことや考えたことを短い論文などにまとめる活動」が掲げられた。しかし、「言語文化」で扱うのは、「自分の体験や思いが効果的に伝わるよう」に「短歌、俳句、随筆」などの文学的な表現活動である。また、「古典探究」では、古典文学を批評し、論じる指導方略は未だ十分に開発されていない。折しも、共通テストの古典問題では２つのテクストを比較分析して論じるものが出題され、難易度が上がっている。高校古典の指導方略改善は喫緊の課題である。

２　本プロジェクトの目的

そこで、本研究では、高等学校国語科学習指導要領「言語文化」「古典探究」における論述指導の課題と、ＤＰ「文学」における古典文学教材選択の課題を解決することをテーマとして掲げる。

国際バカロレア教育（以下、ＩＢ）の高校２・３年生のディプロマ・プログラム（以下、ＤＰ）「言語と文学」では、文学作品を分析し、論述する力が求められている。

教材とする書籍を選ぶ上で、文学形式、時代、地域（国や大陸）に関する条件が課されている。教師による選書基準を示す「指定作家リスト」では、文学形式別に、出版された世紀、大陸、国名、作家の性別のリストが示されている。「フィクション」では、『竹取物語』『源氏物語』『今昔物語』『平家物語』などの物語や説話、「ノンフィクション」では『枕草子』『方丈記』『徒然草』『おくの細道』などの随筆や紀行文、「韻文」では『万葉集』『古今集』などの和歌や俳句、「戯曲」では能、狂言、歌舞伎などの作品があげられている。これらの作品を、日本の近現代文学、翻訳文学と合わせて、３

つの条件を満たすようにバランスよく選書することが定められている。教材とする古典文学作品は日本の教科書教材と一致している。

シラバスでは、「読者・作者・テクスト」「時間と空間」「テクスト間相互関連性」の三領域が設定されている。本研究では特に「テクスト間の関連性」に着目した。「テクスト間相互関連性」とは、文学作品の本質、作者の選択、読者の反応、作品のコンテクストなどについて複数のテクストの比較をし、探究することで、テクスト間の関係性の理解を深めることを目指している。この領域を古典文学作品で扱い、時代の異なる文学作品と比較することを通して、文学作品に描かれる普遍的な主題をつかませることを意図したからである。

この「テクスト間相互関連性」の理解を試すのがＤＰ最終課題の「試験問題２」である。「試験問題２」は、探究テーマが出題され、二つの文学作品を関連付け、意味づけて論じる比較小論文が出題される。例えば、「世代間の対立の表現」「恐怖が作品において果たす役割」「登場人物を作り上げる作者の方法」「時間軸と時間の流れの作品への効果」といった概念的な探究テーマが出題される。これらはどのような選書をしていても論じることのできる抽象度の高い設問である。受験生は学習してきた書籍の中から二つの作品を選び、類似点や相違点など、テクストを比較して、１時間 45 分で小論文を書く。

「試験問題２」で出題される概念的な探究テーマは、ＩＢ教育の基盤となる概念型カリキュラムが目指す「一般化（Principle Generalization)」に相当するものである。「一般化」とは、洋の東西や時代を問わず、共通する普遍的な原理、原則のことである。ＤＰ「文学」では、テクストの主題を概念を活用して事実の本質として捉え直し、普遍的で汎用性のある文学の原理・原則の理解を促すことを目指している。文学作品に通底する原理・原則を読み解く概念理解型読解力は新たに出会う作品分析でも活用できる普遍的で汎用性のあるスキルである。

DP「言語と文学」では、「アイデンティティー、文化、創造性、コミュニケーション、観点、変換、表現」の７つの主要概念を設定している。主要概念とは、文学作品を分析・批評する上での観点であり、主題の本質を映し出すレンズのような役割を果たすものである。本研究ではこの概念的理解の理論を用い、古典文学作品の主題の本質を見出させていく。

本プロジェクトでは、この指導方略を取り入れ、古典文学教育を再構築することを目標とした。

３　本プロジェクトの実施および研究成果

３－１　成果１　国語教育 SP「国語科の内容構成と開発Ｂ」の授業開発

令和５年度秋学期、国語教育サブプログラムの「国語科の内容構成と開発Ｂ」（担当：中村、斉藤、川上、篠崎）において、三島由紀夫『近代能楽集』と原典となった能、説話、源氏物語などを扱い、夏目漱石『こころ』との比べ読みを行った。

第１・２回の導入では、ＤＰ「文学」の解説と共に、時代やジャンルを越えた作品を比較し共通するテーマを見出す練習として、和歌と短歌、和歌と Jpop の歌詞の比較を行った。第３～７回は能楽の基礎、「葵上」の源氏物語と能の比較、「道成寺」伝承、説明文教材比較に関する大学教員の講義を行った。院生の探究活動の成果発表は第８・９回に行い、第 10・11 回で「試験問題２」の小論文の書き方を指導し、『こころ』との論点を検討した。小論文執筆は冬休みの宿題とした。第 12・13 回で小論文の相互評価の採点会を行い、第 14 回ではまとめとして古典教育の意義を振り返った。

国語科の内容構成と開発Ｂ　シラバス
第１回　オリエンテーション 短歌×和歌の比較　ＩＢ概念理解の解説
第２回　DP「文学」「試験問題２」解説
第３回　講義①　能楽基礎
第４回　講義②「葵上」源氏物語と能の比較
第５回　講義③道成寺伝承について
第６回　講義④説明文教材における比較の意義
第７回　能「葵上」近代能楽集「葵上」鑑賞
第８回　１班「葵上」２班「道成寺」発表
第９回　３班「卒塔婆小町」４班「弱法師」発表
第 10 回　講義④　DP「試験問題２」の書き方
第 11 回　講義⑤　二作品比較の論点
第 12 回　１班２班　小論文　採点会
第 13 回　３班４班　小論文　採点会
第 14 回　まとめ　古典文学教育の意義

「葵上」班では、六条御息所の情念の描かれ方にの比較を行った。『源氏物語』では車争いの恨みや光源氏への執念深い愛、葵上への嫉妬が生霊となって表出し、葵上にとりついて苦しめる。しかし、本人が眠る間の無意識下での現象で自覚がない。能「葵上」では、理性的側面の照日の巫女呼び出された霊が衣で表現された葵上を扇で打ち据え、物理的に攻撃する。さらに、僧の祈祷に対抗して般若

に変身することで、情念の深まりが表現されている。一方、『近代能楽集』の「葵上」では六条は葵上への恨みよりも光に愛を訴えることで情念を表現している。昭和戦後期の時代の価値観が自己の感情を直接男に訴える現代的な女性像を描くことを可能にしたと分析していた。この探究の成果を踏まえ、院生Aは、「人の負の側面である嫉妬の表現方法とその効果」について、能「葵上」と『近代能楽集』「葵上」の探究の成果を論じ、『こころ』では、先生の嫉妬心は他者に気づかせないように描かれていることを見出した。この院生は、オリエンテーションで、古典の授業では登場人物の心情まで扱わなくていいと発言していたが、本授業の活動をとおして、「情念」「嫉妬」「死」といった、人間に普遍的に存在する概念や見方・考え方に気づくことができたと振り返っていた。

「道成寺」班では、鐘と箪笥が作品の展開に果たす役割を分析した。『道成寺縁起』では鐘に逃げ込んだ男が蛇身の女によって焼き殺される。能「道成寺」では鐘はもぐりこんだ白拍子が蛇身に変身する場として機能する。『近代能楽集』「道成寺」では箪笥は死んだ恋人を追って閉じこもった女が合わせ鏡で己と向かい合い、執着を解消し、再生を果たす場となる。院生Bはこれらを踏まえ、「登場人物の行動選択に寄与する舞台装置」というテーマで、箪笥の役割を分析し、『こころ』におけるKの部屋の襖の果たす役割を分析した。Kはお嬢さんへの想いを告白する時、上野に出かける晩、自殺をする前と、３回、襖を開けていた。襖は、Kが他者を求める心を表彰しており、Kの行動を促す働きを果たしたと分析した。この分析は説話や能との比較によって可能となったものである。この院生はリフレクションで、小論文に能を入れ込むことはできなかったが、能や当時の文化的背景について調べることが純粋に楽しく、これまでの押し付け的な古典の授業を脱し、探究的な学びが実現することを実感したと述べていた。また、能「道成寺」を分析により、『こころ』の読解では立体的に新たな観点が浮き上がってくることを予期し、能動的に読めたと述べていた。

以上２つの事例により、時代とジャンルを越えた二つの文学作品の比較が、双方の作品の本質を照射しあうことを可能にし、新たな論点を触発することが立証された。院生Cがリフレクションで、時代を越えて共通する人間の普遍的なテーマに気づき、古典文学を現代の自己や社会と接続させて読解する学習が可能となったと、述べていたことからもこの方略の効果が確認できた。

３－２　東京学芸大学附属国際中等教育学校DP「文学」１年『源氏物語』の授業開発

浅井は、令和６年１月、DP「文学」の授業で、『源氏物語』を扱う授業を、中村との協働で開発し、実践した。「人物像」を観点に、光源氏をとりまく女性達を分析し、時代の異なる現代語訳から表現の差異や、夏目漱石『こころ』やカズオイシグロ『私を離さないで』の女性像との比較分析を行い、小論文執筆に取り組んだ。

３－３　高等学校国語科学習指導要領・教科書における「比べ読み」の位置づけ

篠崎は、高等学校国語科の学習指導要領と教科書教材の「比べ読み」の位置づけを明らかにした。昭和35年度から平成元年度の学習指導要領において明示的に「比べ読み」を求める記載はなかった。平成11年度版学習指導要領から言語活動の例示として「比べ読み」が記載されるようになり、平成30年度版の改訂で指導事項として「比べ読み」の文言が記載されるようになった。教科書においても、旧課程の「国語総合」から新課程の「現代の国語」と「言語文化」にかけて、教科書における「比べ読み」課題が増加していることを明らかにし、本研究の有用性を立証した。

３－４　古典文学の比較読みの新たな授業開発

湯浅は、令和６年春学期、教職大学院生対象の「国語科の内容構成開発と実践Ｃ」において、『竹取物語』を軸に比べ読みの授業を開発した。平安初期の『竹取物語』と平安末期の『今昔物語集』巻31-33話との比べ読み、鎌倉末期の『御伽草子　浦島太郎』との比べ読みから、時代を越えて人が追い求める不老不死について考察を深めさせた。

川上は、平安後期の『宇治拾遺物語』「袴垂、保昌にあふ事」と鎌倉期の『義経記』「弁慶洛中にて人の太刀を取りし事」の比べ読みの授業を開発した。平安後期以降、『平家物語』の軍記物などで「武力としての強さ」が描かれる中、軟弱で貴族的な保昌と牛若丸が戦わずして「強さ」を発揮する姿が描かれ、際だった英雄性が付与された。雅で強さを誇示しない英雄像は現代の漫画やアニメにも受け継がれていることを示唆した。

浅井は、浅井教諭は、中学１年生の授業で、概念「ものの見方」を主軸に『竹取物語』で姫が帝との別れの詠んだ歌の「あはれ」に焦点をあて、現代のポップカルチャーの別れのシーンとの比較分析を行った。

杉本は、高校３年生の授業で、「時間・場所・空間」の概念を通して、江戸後期の黄表紙『三国昔噺 和漢蘭雑話』に描かれた異国趣味的な要素の機知とユーモアを読み解く授業を発表した。

３－５　学会・研究会における研究成果の公開

上記の研究成果を以下の学会、研究会等で発表を行った。

○日本国際バカロレア教育学会　第９回大会　2024 年 9 月 15 日
　中村純子
　「DP 言語 A における日本古典文学指導の可能性－高校国語科「言語文化」への活用」

○東京学芸大学国語教育学会　10 月定例会　2024 年 10 月 12 日
　中村純子・浅井悦代
　「高等学校古典文学教育における概念的理解への新たな提案
　　―国際バカロレア教育ＤＰ日本語Ａの方略を用いた比較分析―」

○全国大学国語教育学会　越谷大会　自由研究発表　2024 年 10 月 27 日
　中村純子・篠崎祐介・湯浅佳子・川上知里
　「高等学校国語科における古典文学教育の新たな視点(1)(2)
　　―国際バカロレア教育 DP 日本語 A の方略を用いた比較分析―」

○東京学芸大学附属国際中等教育学校第 9 回公開研究会　2024 年 11 月 23 日
　浅井悦代「概念「ものの見方」を主軸にした教科等横断的な取り組み　公開授業１　国語（竹取物語）」
　杉本紀子「時間・場所・空間の概念を通して自分の位置を探究する-生徒の視座を高める単元設計　公開授業２　古典探究（古人の「知」に迫る）

○IB 国語研究会ウィンターセミナー　2024 年 12 月 14 日
　斉藤昭子　講演「源氏物語のナラティブと葵巻の方法」
　浅井悦代　「DP 日本語 A における古典文学実践報告－『源氏物語』を中心に」

４　本プロジェクトの成果と課題

本プロジェクトでは、ＩＢ教育のＤＰ「言語と文学」における「テクスト間相互関連性」の指導領域に着目し、古典を他のテクストと概念的に比較分析することにより、文学的な本質を照射する読みの指導方略を構築できたことが大きな成果と言えよう。

今後の課題は、現行の高等学校国語科「言語文化」「古典探究」「文学国語」の教科書教材から、比較の組み合わせを検討し、実際の授業検証を重ねていくことである。古典や近代文学、現代文学といった時代を越えて文学作品そのものの本質を探究する概念理解型の読解指導方略を確立していきたい。また、その評価として小論文指導と評価の方略を開発することも目指していきたい。